



京都大学文学研究科 グローバルCOE 「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」

学会発表渡航支援報告書

| | | |
|---------------|--|---------------------|
| (ふりがな) 氏 名 | やすい だいすけ | 所属・職名 |
| | 安井 大輔 | 京都大学大学院文学研究科・博士後期課程 |
| 発表題名 (英語) | Ethnicities from food: Food culture of immigrants in a multiethnic area in Japan | |
| 著者名 | 安井大輔 Daisuke YASUI | |
| 会議名 (英語) | 2012年世界社会学フォーラム The Second International Sociology Association Forum of Sociology | |
| 開催地(国、市) | アルゼンチン・ブエノスアイレス | |
| 参加期間 | 2012年 8月 1日 ~ 8月 4日 | |

学会発表渡航支援報告書**学会の概要**

筆者が参加した Forum of Sociology は社会学のグローバルな学会として最大規模の国際社会学会 International Sociological Association (ISA) が 4 年に 1 度開催する世界大会である。本大会は、研究分野ごとに分かれた 55 の部会 Research Committee (RC) から構成されるが、申請者の所属する Research Committee : Biography and Society (RC38) は人々の生活や経験から社会構造や歴史的過程を見通すことを対象とする部会であり、近年は移民のアイデンティティやライフコースをトピックとしてたびたび取り上げるようになっている。

筆者は同部会が移民の移動プロセスと食べ物の関係を問うという趣旨のもと設定した "Food as a special symbol in the migration process" というセッションで、発表を行った。

発表の概要

従来の移民と食文化をめぐる研究では、「食」は、自らの民族的アイデンティティを表出し排他的に自集団を純化するある種の固定的な資源としてみなされてきた。(ここで述べる「食」とは、食べる行為、食べられる食物と料理、食べることについての思想や宗教などを含む総合的な概念である。) だが、グローバル化の進展とともに多文化化しハイブリッド化していくなかで異なる他者との間に共同的な意識を創出する性質ももっている。この「食」がどのように位置を変化させてきたのかを探求することは、現代世界の社会・文化研究にとってもきわめて有意義なものである。

こうした問題意識のもと、筆者は横浜市鶴見区にある多文化コンタクト・ゾーンを対象に調査を継続している。筆者が対象としているのは、日本あるいは沖縄からいったん南米に移住した人々の子や孫が 1990 年代以降、日本に出稼ぎにやってくることで鶴見区に形成された多文化状況である。鶴見区は戦前から沖縄や朝鮮半島の出身者が多く居住していたが、彼らの来住によってより複雑でダイナミックなマルチエスニック状況が生まれている。発表では、上述の地域で行ってきたインタビューと参与観察で得られたデータをもとに、現代日本の多文化地域に生きる移民の食と彼らのエスニック文化(エスニシティ)の関係について報告を行った。

報告では、対象地域に暮らす人々の食とエスニシティを「社会」(移民の送り出し元と受け入れ先の国や地域)「状況」(いつどこで誰と食べるかの相互行為)、「歴史」(親子の間で継承される記憶)の 3 コードの束として整理した。その上で、食の好みの違いに基づき、移民の各段階におけるエスニシティの生成と変化について論じた。

学会の成果

残念ながら、衣食住という生活文化の中心に位置する食文化から、人の移動を分析する研究は、日本の社会学では十分には認知されていない。しかしながら移民先進国である欧米を中心とした海外の社会学会には、Food Sociology を標榜する研究者の数も多く、理論や事例の蓄積も進んでいる。それゆえに今回は世界規模での社会学会に参加することで、一流の食の社会学研究者たちとディスカッションし有意義なアドバイスをいただくことができた。

学会発表渡航支援報告書

さいわい筆者の報告に関しては、セッションの司会から日本の研究ではこれまでなかった珍しいマルチエスニック地域のエスニシティを多面性、本質主義性、流動性などの交錯するアリーナとして描き出す先駆的なものと評価していただいた。また同じセッションで発表を行っていたイスラエルやドイツの研究者らとのディスカッションではエスニック文化の継承について議論することができた。またその際、会場フロアからのコメントでは言語教育にも注目していくことの重要性が指摘され、今後の調査研究のアドバイスとすることができた。

また筆者は今後の研究課題として南米における沖縄移民の調査を計画しているのだが、学会のレセプションでは、ブラジルにおける日系移民を研究しているブラジル人研究者と交流することができた。彼との情報交換ではブラジルの研究機関や研究者を紹介していただき、今後の研究進展に不可欠な研究者ネットワークを構築することができた。

